

明治卅六年九月  
館長日誌



特別  
14  
1919  
923





留  
1827  
15x

14  
1919  
923

明治三十七年以降市島謙吉氏  
圖書館々長タリ其ノ當時ノ  
日誌ナリ

010190048280

彼長日誌 (昭和十一年中九月以降)



九月五日

- 一 本朝の彼中ニ彼長を合し一筆紙を以
- て開帳準儀の根拠を以て計録中ニ
- 左の諸件を合し合し
- 一 関説票五枚取油を以てす
- 一 関説票五枚取油を以てす
- 一 九月十七日ニ関説票一と決し
- とんたんの関説票と決す

明治三十七年以降市島謙吉氏



右に開く指示をみる

一 印刷目録和洋二種閲覧室に備付

一 印刷目録外の圖書をカードに備付

一 之れを備付

但し印刷目録にありある圖書カー

ドミ更なる便宜の便海物をみる

マシる各簿台を換る

一 和漢書目録の便宜を門に依る今刻

一 印刷目録をみる

一 洋書目録を張込替り貼付し上付

付くべき

一 新聞雑誌(四)のカード目録を備

付くべき

一 新聞圖書指示

此目録を改定し若中宛切原の方手紙を以て

〇九月吉

秀英全に委託せる洋書目録千部出版

右之北の印刷目録と課し七海物

七しめしる也頁数二百七十段也



抄る十一のハ十五也、一冊を續き三十紙  
と言ふ、内務省、納下の手続を了る

〇六

實業学校校長とお任の上自今日夜三斗位  
以上のさうさうと早稲田のさうさうと  
圓吉館費を中興つて、御集りして、清  
館長との校舎を建て、御集りして、  
多日来、徳を争うる、御集りして、  
次三十七年、日本紙、決り、書、ら、〇、出来、る、紙

長の手を、差出せり

市井中、河内、毒、民、多、振、ら、る、を、整、理、中  
ろ、ろ、し、心、旅、旅、た、り、り、有、報、連、の、報、等、〇  
と、心、取、況、と、其、事、を、り、り、右、の、目、録、系、に、  
の、カ、ー、ド、の、編、製、中、ろ、ろ、し、心、取、本、方、を、以、て、カ、ー  
ド、の、編、製、を、り、り、と、告、げ、る、と

〇十号

大坂、栄、横、井、時、冬、五、氏、(商、科、評、議、の、  
本、館、副、議、員、) へ、囑、托、す、り、決、し、囑、托  
状、を、送、附、せ、り



○十号

来十九の午後二時より本館にて高議  
ありし事ありし決し案内状を差送せし  
也

昨日より潤覧案ノ文附ヲ始メ本日引  
續文附中ナリ

石井森洋様より和漢書現在油完全  
中と云々ありし以テ終るし本の調査報  
告書ヲ提出セリ

加藤和夫様より新購書手續中

~~~~~  
ありし事ありし終るし新購書と云々  
披露ありし事ありし

和島代平に管見部係入ノ事ナリ

○十号

圖書館財政目録調査中し事本の調査  
ありし事ありしは圖書計号ありし一切を  
けし七号ありし千の也此由建案ありし  
三十三号ありしに属する計ありし事ありし  
ありし改定し属する圖書と其價を定む  
る由ありしありし左の標準を設けし



計 冊数

和洋書

三冊平均三十九

洋書

四

寄贈洋書

七十五

〇十七

本の閲覧を許可す

ある中、いかに整理し、未だ四冊を  
本し、其の合本を二冊とし、書部を附  
し、且つカードを必要とせんを、閲覧の  
便利を

付、此の取らぬの結果、洋書の  
冊数を、今より四十三冊也

和洋雑誌を、其の目録を編入するに、便  
の  
あり

和雑誌(合本一冊)

二十五

洋雑誌(合本一冊)

七十五

〇十六

本館の蔵書目録再査を命じ、其の結果  
を得



統計

七卷七千七百四十四冊七十三卷二序

本校商科：商部陳列部ヲ設置ノ計畫ハ有リ  
校長ト本邦ノ高等商業学校ノ比較研究ニ関ス  
部親覽シ為出陣ス

〇十九日

本日午後二時ヨリ大講堂下空接室ニ於テ本  
館高瀬先生ヲ用ク十二三名未分ヨリ長  
長ニ圖書購入ニ打合ヲ為シ各案

と御覧シ之報告スル、之を商部陳列部ニ  
一ニ以テ一ノ第一回集會トシ、未分ヨリ長  
トシ

|      |        |       |
|------|--------|-------|
| 大隈行幸 | 森井他以   | 波多野敬直 |
| 大隈 宗 | 横井以冬   | 以冬也雄  |
| 中打進子 | 鈴木喜幸   | 沼田如民  |
| 吉田幸但 | 以井一春   | 堀内維好  |
| 田中隆平 | 彼中外彼又云 |       |

〇二十一日



本。同。之。所。財。之。目。録。之。受。の。手。之。提。出  
す

学。監。と。根。拠。之。未。高。科。之。同。書。購。入。高。出  
改。列。致。没。備。と。し。本。年。分。に。於。て。金。回。書  
内。を。終。了。す。亦。之。追。加。之。件。を。決。す。但。し。此  
追。加。金。額。ハ。學。監。之。と。徴。収。す。同。書。費  
者。と。し。支。出。し。す。

同。書。購。入。費。ハ。由。來。之。多。く。混。法。購。入。費  
ハ。就。今。年。分。内。を。左。に。記。載。し。之。支。出  
す。と。す。ハ。之。と。根。拠。す。

就。今。年。分。内。也

内

三。万。円。也

純。文。子

七。万。円。也

二。万。円。也

佛。語。法。律。也

十。万。円。也

獨。語。法。律。也

五。万。円。也

三。万。円。也

國。法。子

二。万。円。也

國。法。子



五ノ四也

五ノ四也

河海賦

五ノ子

〇二十一日

来月文庫組合に催しを致す旨を以て  
くの孫定より考査申す本館に大体の案  
を呈し置りて其案ありしに依りて其  
案を採擷し上懸り系に準備案を採  
定せり、進上候申す中輪博覧會若  
坑湖の上決定に御元也

書の中四卷より高料考査用と表年冊  
辨入寸代候申す五丁也

皇清正解漢書四十一帙其の山等より辨  
入代候申す五十四也

〇廿二日

圖書部附屬湯谷毛馬草紙(五ノ子)件  
目等考査に高湖より在り久松より一丁候し  
又是を呈し置りて御元也

高料清以大方切葉表田原三友氏より  
呈考査書目辨末に月報を呈



出さん

○廿六

横山又りしに化石之批圓五幅字の終るる  
 史彦集漢之細目録をカードに必  
 々如く記する由あり今も尚書  
 書に於て他六冊に書之終る日  
 手続をまじし候へし都立也  
 松山を抜きたの書之終るに漢又を  
 たり

一 史彦集漢十法 一 肥後國誌  
 一 反妹景の書 一 島内風土記  
 一 傍史之終集漢 一 備中花水園會  
 一 集古文書 一 仙後風土記  
 一 書方終古解題 一 山梨郡村志  
 柳澤氏に於て終集漢に於てし  
 ありし人を出さし  
 終集漢の由氏に於てし  
 在終集漢の由氏に於てし  
 終集漢の由氏に於てし







但し十月十一日曜日の日曜

この道校交編輯ありて古きものに入ると格素  
を約可ししむるし家日々目録し印初  
出来たるを故に之を禁するも口し洋河  
を従ふ可し也 以上

博文館出版部にて存し由故を以て  
元油心海文あり

柳澤海とて西の雑誌(寄題)を録せり  
増の森(西)とて徳子(西)を著すの大辞典に  
十一月十日録あり

四月録カード油心を前々より流き油を  
とあり

十月一日 雨

右の中一やまの左の雑誌購入し一出版

Illustration

Jeux du monde

差もを前者購入しとあり

本を閲覧するもありし初を満員のれと



揚子河入場と謝絶の

新子期開始以後交附七の閲覧案(八月三十日)  
徳井一七六八内二と一七〇七 特例(校友并実  
業多枚致(二)一実業多枚と従四。此外本枚  
海河、文作し物お券一二二枚也  
但し、受付等清本古も徳井一九一七ころと

十月二日 雨

東京より増え送出版し越戦の書、世界  
歴史譚——と海文と為す

考近細目収と心とを古の種名のみ

四史大系 続四史大系 史籍集覽

続史籍集覽 皇朝外書考 日本歌之全書

法知書考 日本文子全書 所書書考

不家没林 中野孝書考 万葉集

ヨリ文庫 続日本歌之全書 神道書考

十三行証疏 二十一字 漢魏書考

皇清行解 三才圖會 羣書類從 日讀篇 以上所種

考好の或事録の自跋中……日記古の種  
(圖書録の寄託し……)……小説類



其の... 洋書目録(印刷...) 脱漏少く... 本館

その... 貴重書系... 内リリース

油... 中俄文... 保良の...

自今帳簿... 納付...

十月、日

日曜... 休日を... 四十人



山崎一印を以て其の井色をえとて其の  
徳の層を以て其の層を以て其の徳を  
為さしむ

其の徳を以て其の徳を以て其の徳を  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を

十月書

河部全林の一冊に其の徳を以て其の徳を  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を

漢書を以て其の徳を以て其の徳を  
漢書を以て其の徳を以て其の徳を  
漢書を以て其の徳を以て其の徳を

坪内氏事録を以て其の徳を以て其の徳を  
坪内氏事録を以て其の徳を以て其の徳を  
坪内氏事録を以て其の徳を以て其の徳を

大隈海翰を以て其の徳を以て其の徳を  
大隈海翰を以て其の徳を以て其の徳を  
大隈海翰を以て其の徳を以て其の徳を

其の徳を以て其の徳を以て其の徳を  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を  
其の徳を以て其の徳を以て其の徳を







一 文庫館蔵の『<sup>海</sup>新編者』の『<sup>海</sup>文庫』

一 漢書の古本初巻を体する馬理の『<sup>海</sup>原版』  
古本初巻を『<sup>海</sup>原版』を『<sup>海</sup>原版』と欠乏、体  
りたる『<sup>海</sup>原版』を『<sup>海</sup>原版』の『<sup>海</sup>原版』

『<sup>海</sup>原版』の『<sup>海</sup>原版』  
清正初版(『<sup>海</sup>原版』)を『<sup>海</sup>原版』と欠乏、体  
りたる『<sup>海</sup>原版』を『<sup>海</sup>原版』の『<sup>海</sup>原版』

十月七日

國文學に属する書物をしるしを『<sup>海</sup>原版』と欠乏、体  
りたる『<sup>海</sup>原版』を『<sup>海</sup>原版』の『<sup>海</sup>原版』

- 在株業書。 日本経済史 稜威言外
- 丹精業書。 和歌文粹 荻原文子
- 古語洋語抄。 徳和文粹 一代和歌勅撰
- 養生要集。 養生直談 後撰和歌
- 和歌入品。 和漢朗詠集集注 後撰和歌
- 江漢和漢朗詠集



奥儀抄

代巻子

歌子抄

神中抄

古東風抄

若心集

撰集抄

沙石集

八雲抄

庭訓往来注

庭訓往来扶翼

若庵集

英政波集

若撰英政波集

犬苑波集

愚問賢注

山来風抄

慕草集

珍名玉集

柏玉集

雪玉集

元梅千句

山歌大板集

梨下集

長歌撰格

短歌撰格

文章撰格

前月来唐本款之快(紙巻)巻心中よりし

京略を以て全部出来り此数七る 十一

北代侯 田 弟也

本朝通鑑代侯十回(系)を以て史を以て

志に以て杉山を以て撰入す

改書局宛合し保之の申中福城氏と云れ

る

海外に越之申す申す徳精の朝来故あり

し甘考の政書念之屋洞信を以て其の

抄然るし出る集の尋の厚行と云る

副に托す



十月廿

物の中は、その氏々々、以て終る、其之、典、況  
刊、三十九、冊、代、き、の、切、一、同、合、八、七、分、の、家  
る、〇、〇、四、五、十、五、束、也、拂、向、く、既、五、十、年  
を、ゆ、り、り、り、  
菊、心、三、の、中、を、も、支、科、を、も、も、も、  
左、の、二、粒、を、支、中、に、は、り、入、り、由、り、既、入、  
り、り、り、

上海新聞 中外日報

天津新聞 大分報

本校附屬中道物(高直高直夜印系其伝  
物、是、使、不、火、炬、也)古、風、生、也、固、し、上  
工、費、大、也、故、方、久、松、行、意、に、托、す  
去、四、年、五、月、廿、日、ま、法、務、省、に、下、請、に  
備、付、せ、る、要、り、り、り、元、神、と、上、本、り、提出、せ、  
ら、れ、り、り、  
去、四、年、五、月、廿、日、葉、原、紙、中、道、行、請、三、氏、年、銀、五  
百、  
改、古、出、産、く、古、一、冊、に、三、の、中、を、も、も、依、り、り、



十月十日

政考局宛宛書を提出するに際し、政考局宛宛書に元簿を  
添付するものとする。

本局宛宛書に氏名、住所、性別、年齢、職業、学歴、  
初級試験の結果を記載するものとする。

本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。

本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。

本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。

以上一頁宛宛書提出の

十月十日

日曜 印刷 閲覧者 五十名以内  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。

本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。

十月十日

本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。  
本局宛宛書に初級試験の結果を記載するものとする。



郵久しくしませるを以ての書状と扱きし宛  
入し諸示を以てしつゝいふて評出書とせらるる  
す

海防出改勅諭状を長谷川泰為原  
惟郎・角田作治（弟）・三ノ中野井  
心也（弟）・周田邦彦（弟）

南葵文庫に文庫保存か入を勅諭  
せしめし家出するに流し合し方  
来し

千葉藩主氏自今毎日出勤修務を

補助すすすといふをいふを氏の名を  
こ出するすすといふをいふを氏の名を  
科洋書の調査を托す（弟）あ托すし  
圖書館にすすといふをいふを氏の名を  
送付す

細目録(カード)二函あり関修部備付

十月十日

文庫保存し保する初め来しすす  
扱す







一本紙簿の書き、致書を宛先を以てし  
揚子とありし。

一各紙の紙にありぬとあるし。

一福正を調へし。

一又存限を以て、時分を以て(十三の  
し)ありし。

事

自今選定を以て、延後し、選定日代  
を以て、告し出さし、其の  
の選定を以て、延後し、其の  
の選定を以て、延後し、其の

事

馬具より、衣類迄、観念し、其の  
多量を以て、其の選定を以て、  
に決し、其の

十月十五日 情状

致書を宛先を以て、其の選定を以て、  
其の選定を以て、其の選定を以て、

其の選定を以て、其の選定を以て、  
其の選定を以て、其の選定を以て、

其の選定を以て、其の選定を以て、  
其の選定を以て、其の選定を以て、



出願印とて板外生に閱覽を許す件  
四合するに、宣旨に閱覽を許すを  
べきと物あるに、御指し可なり  
と決定す

子孫多額より南神門内なる  
若くは後印を返す事  
す

十月十日 西

多額中移すに、出願和漢書と  
又の長考各に、上言、伊予の  
外

早王五本を辨る

多額中移すに、出願和漢書と  
辨る

多額中移すに、二階、伊予、  
案に、尺、板、万  
を令下す

政法二本(空行)海義、本、及、海、義、好、と、交、換、  
し、御、指、下、し、存、在、尺、板、指、下、す

細目カード十三紙、海、義、好、と、自、古、活、字、解、を  
函、に、封、入、す、し、し、

十月十日



秋竹翁著書中休室名孫時分と云ふ事  
諸細信屋と云ふ孫孫多分連終と云ふ事  
事月方名して付る白らりす

政事と云ふ迄念ふと出海くも知来上り  
青波大子海史係清嘉事と云ふ事  
日と云ふ陳列と云ふ事  
二印折本と云ふ事  
往海終と云ふ事  
を信入御書中

大子海史深う終る事と云ふ事  
廿四日

時と云ふ事  
支那人名字と云ふ事  
北史と云ふ事  
代名と云ふ事

支那人名字と云ふ事  
北史と云ふ事  
代名と云ふ事

十月十九日

明廿日未投名主記念ありと云ふ事  
其方揚子と云ふ事  
政事と云ふ事



美術之技角の如くは花原惟新の如く  
あり

紙留備えたりとの宗比方より作らる  
話

政書出陣し侍りし柳原保義の侍と伝  
其の出陣の事迄を記す

杉山常一と又ある歴史文藝会に  
若干部と購ふ此代價二十三日

又之を記しある事、政書出陣の如  
くの中一は記す。きり方精進し舞を

其の如く

又本校の如くある事、各事より  
記す。其の如くある事、

十月廿。

本校の如く記念より作らる  
事、其の如くある事

十月廿。

一大院存考、氏年、彼、杉山、保、山、五、七



又書系之致書目録を録する事

一 柳原保徳の傳記と口傳断出伝書目録  
如状を録す

一 校友の答名例事録あり

一 大徳院書札如本に伊東豊助を録  
録あり候傳記ありて事と接す

一 華池三のりも事録有漢書一節を  
出傳する事致書に鑑定を乞ふ

一 松本元吉の事と傳記に待書治文  
と要する事日元功を待書一筆しき

交書提出せん事

一 後保昌三氏に致書を致書と出書  
の事傳記に元功系に解題の伝記  
を托しし事略あり

一 后保昌三の出傳書に「」とある事  
三の傳記に「」の中元功傳記  
副に傳記なき如あり。傳記方書四  
方系に托す

一 致書各書之存し傳記然る事存  
在しその中一給傳記あり系を、系



又りりの中阿羅摩 那阿通也  
そそ摩坊す

口分し得る井上田了しし年古也  
已

十月二十日

・ 中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の  
へりりし、中川徳基 村阿部 妻娘又は  
中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の

油の年傳ありし

・ 中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の  
へりりし、中川徳基 村阿部 妻娘又は  
中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の

・ 出公目録原形ノおちりりふ二のし  
一 括えんと帝國をさるる、中川徳基  
送所す

・ 中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の  
へりりし、中川徳基 村阿部 妻娘又は  
中川徳基を尊ぶる、時にさるる、里の







し草子後集に二十一代集を傳入の  
意は如何し、出所は如何也

一 杉田宗素、去しおに接あり

一 杉田宗素、去しおに接あり

一 杉田宗素、去しおに接あり

一 山上宗茂、去しおに接あり

一 山上宗茂、去しおに接あり

一 山上宗茂、去しおに接あり

一 山上宗茂、去しおに接あり

一 山上宗茂、去しおに接あり

念とあり

念考

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其

一 日曜開會、め六集、いふ、関後集、其



也

一 此の形に於ては、  
と列をさすの十の字は、  
列をさす

一 係出陣上敷三九十一ハ  
園角字に係付し、  
之ハ一杯さす、  
の数を逃いたる、  
部をさす

一 此の形に於ては、  
閉合の形を初め

のさす、  
此の形に於ては、  
此をさす

一 係出陣上敷三九十一ハ  
園角字に係付し、  
之ハ一杯さす、  
の数を逃いたる、  
部をさす



去の執心する事助うんを其人を  
 するをんを北條の合年あつた程も  
 心をえふつうこそも病く親類の大  
 なる之を以つて病久とい  
 一 半信田園を病く印纏りて未  
 又人う病くのををみせぬ病久  
 此の病久を病くといふ下の病久を  
 一 事を得る之快とするま也  
 一 此病く病久を病くといふ  
 病久を病くといふ病久を病く

大寺より病久を病くといふ病久を病く

念ふ

一 高橋邦と病久を病く  
 一 病久を病くといふ病久を病く

一本の病久を病くといふ病久を病く

病久を病くといふ病久を病く

病久を病くといふ病久を病く

大徳寺 病久を病く二十一代集



根本の如 朱氏は其の 情あり

道徳論

中川徳基 竜谷のり

一 石井也即ちあ、わあをををん

一 活ぬさふもま叔、中川也意も本質又の祖

一 又川路聖謨の生れと怒る 施物おを

一 伊予守助(休なき人)ち怒に幸氏 怒りて

一 ちりちり偏入嶋島り一程久也

一 大徳師有徳くはる里田清親事候

ちり

一 増子春氏事候ふ嶋島り一の如也を云

ちり

一 長田行成(一)と露探る事とやんかこ不

一 日昇り半流流下し候る早川の如

一 今(一)をいふおれをいふ

念する

一 雨も竹は露一件、測しる事候ふと云ふ

一 道徳論をつとめ、ちりちり事候候

と云ふ



念公 雨

一 杉山等々又十数部とわかれ方とに江又

一 馬場危後念公の林書と伴

主田幸何氏に托す所と云ふ事

一 早稲田等抄に登載し判也

一 川田等々博士と云ふ所の書種と云ふ事

一 幸何氏に托す所と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 彼等其の所本を入る事と云ふ事

方返巻と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 堀越と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

一 杉山等々氏と云ふ所の書種と云ふ事

了



一新校友(三十三年迄)と寄附勸誘  
出共と立案し、少彦將君と交  
付す

一校友(山形)田中準一氏より地方地圖  
寄贈しる也

一少彦將之凱氏(二十二年迄)の初  
御(二十三年迄)の御(二十三年迄)の御  
しる也

一廿二年迄の御(廿二年迄)の御  
本館下之とあるは、初御(二十三年迄)の御

一御(廿二年迄)の御(廿二年迄)の御  
少彦將(廿二年迄)の御(廿二年迄)の御  
りし出を添し、廿四年迄の御(廿四年迄)の御  
更け少彦將君と交(廿四年迄)の御(廿四年迄)の御  
とあるは、初御(二十三年迄)の御(二十三年迄)の御  
しる也

一廿四年迄の御(廿四年迄)の御(廿四年迄)の御  
御(二十二年迄)の御(二十二年迄)の御(二十二年迄)の御  
即ち二十二年迄の御(二十二年迄)の御(二十二年迄)の御  
一廿四年迄の御(廿四年迄)の御(廿四年迄)の御







一 冬路の途に片屋敷の如き鳥の棲る様  
 一 又鳥の如く色一 終るをりを終  
 一 編終に法解題目相贈の方を以て  
 一 高白の如きと 読後家 精進の白二階友  
 一 場と作の解 一 読後をいしと 振張るる  
 一 仲若く外四角 買入 明るるし する  
 一 松葉をうすむる

一 本級花の中用長 一 日書教りたるもの  
 一 之類 掛ひ他より 三階 階入の 判るる  
 一 既より 伝へたる こと 目録 こと 其の 油  
 一 一 着る こと  
 一 一回 出 坊 如し ぬ 如 簿 書 柄 精 進 こと 或  
 一 法 付 つ こと 柄 理 事 こと 条 こと 二階 こと 柄  
 一 才 又 条 本 坊 十 冊 こと 洋 文 加 こと 係  
 一 二 柄 こと  
 一 一 購入 園 山 こと 傳 へ 中 柄 在 事 こと 一 冊 こと



十と心もらるるに接す

一 枝及大周縁をりしきと記す

一 接上●より周縁をりしきと記す準併より一と机

椅子を必すのき用あると下字に併付

ある机椅子のきも心も入るも油心

お其の結果右に記す

全七号三十三回七十一巻

此の

百二十九号は十丸 椅子代

外

五十六回は十丸ある 机四十五脚僅僅

一 加座と心もらるるに接す 部より別代價

と油心を余す







By J. A. Hobson  
N. Y. Japan Post Co.

一 寺島寺多岐洲越の如く自云々の法書也  
一 明らりぬるの田原の伴之助書也  
一 行く方々を仰し 田原の伴之助書也  
一 移り

一 川の傍に土橋の字あり 伴之助書也  
一 冬に 照多州を渡る

一 左の圓の字あり 伴之助書也

・ 水泊画巻 九十冊 第七 四

・ 史書河内伝 五冊 一四二 一五

・ 板入抄 五冊 三十五 六

・ 後醍醐寺抄 六冊 二十九 六

・ 徳川令印 十冊 八十一 七

・ 打井中々巻 十冊 七十四 八

・ 以上十巻

・ 徳川門出紙 一 三十五 九

・ 虎馬抄 七 六十一 十

・ 棋局抄 二 六十一 十一











一 鈴木みかど蔵の海防ノ出久とるもの海防  
 文からしめ佛國刊行の圖をよとてあぐ  
 ず浪文ししもの決し其の手控をか探  
 る命あり併し支那の力にタシ十部  
 七のめ浪文ししもの北の力にタシ十部を  
 出政部ししものさうとてさう後するさう  
 といひ部のあまをいひの浪文と  
 為す也、右一切の代傳を圖にあらわ  
 して付拂ふ也

一 支那人と群衆の殺傷の加入するにその

り改り

一 枝反、難重、寄治、秘海、物、以、通、小、序  
 狩、由、級、中、又、校、訂、し、り、り  
 一 十、林、者、初、後、し、し、易、具、し、し、し、し、馬、し、改、る、  
 校、訂、し、し、木、あ、と、き、り

七、七

一 枝、反、由、中、準、し、し、山、に、級、及、内、に、圖、一、軸、を  
 寄、宛、し、し、り、り

一 貴、手、宗、と、ん、と、お、お、関、為、言、し、後、を、し、り、り



時考三年二階と稱し、あまをくくると貴くすむの  
油壺より高年せしめらるる

一増田重之助氏より後史に於ける著四解と  
代まる八田路よりはあつた内事  
路部あるは増田也、納金するは  
方合村方：余り

一増田重之助氏用開の都なるカード函  
を二枚とす。き方時向に余り  
一國文大親の御目と心

九

一島田三郎一初集より及生と初政と旋  
亦他

一築原清貫年賀の白方架設計と  
おんを考す

一丸善の店よりくる島田に徳外四代書  
の字の始り

一松山寺より國文書二十巻をい辨入  
す







十一の

一 國史館に在るもの原形をあらわす  
 一 水谷子彦「くわん」の購入(圓山)の件は  
 本館にあり  
 一 松山「くわん」の國史館に在るもの  
 出法と上に換せしものも購入す  
 代價四十圓に在り  
 一 柳所通世氏より「くわん」の複製一冊を  
 借入す(在る)と直る。支那系五氏の件を  
 行ふ言ふを附す

一 五月(十月中)の和洋古塔加印数元油く  
 一 心之辨別を以て結果を得るを併し(内  
 七宗塔回書)もねを去る月に入ると  
 薄し手続をりし事を以つておぼやか  
 こといふ

|     |     |      |
|-----|-----|------|
| 字の部 | 二〇三 | 五〇六  |
| 購本  | 二三九 | 一一三三 |
| 総計  | 四四二 | 一六三九 |

各各種目、記しを細表を本月廿号迄  
 行いしを概し掲載する事を以て既に見るべ



十二日 晴、風

- 一 園と館の間に平石を敷き、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を

このことを以て式干しを橋上に移す

- 一 橋上にて園邊を築き、是を掘り、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を
- 一 打ち、是を根柢として在し、是に釘を

一 於木海のり、其の溝の提出し、活板を

用ひ、是の上代價を考し、其の代價を



一 書狀を長と短と区別するべきこと  
一 文部省の圖書類案の表裏表裏を  
了るべき方達を了るべきを望む  
一 古くよりある油書と如き

十三号 時

一 左の圖書細目録と関係をもつて  
一 山

圖書大観 (一編の未定)

集古十種 (一編の未定)

史籍集説 (政定不手紙に依り)

一 学務を勸る行政書局説を記  
るの記 (吉田多作氏執筆) 下の出来事  
移るべきこと

一 佛國の口く不出る事 圖書籍入

一 佛國の書籍を佛國に復歸本宮  
一 佛國の書籍を佛國に復歸本宮

一 梵文の十二平仮名出版  
一 梵文の十二平仮名出版







十四日 快晴、

一 北條邦子より著書「法蘭西未読書」

一 井上雅二より中央五回五返り記と書翰し  
来り

一 十書

日曜

飯島出巻中

十一日

一 板友下村武元、お谷孝彦、田中久太郎  
の書に接す

一 村友下村武元氏の著書「中文を学ぶ者」  
より「白雲」の語をみる

一 事務用カード（和漢もみ）を作る必要  
を認め、目録用と用紙用とを区別し、堅  
の書き面、四角線を引くも使ひ易く、  
この点も、色紙に、四角線を引く、  
の上と、印刷目録外の書目と此のカード  
に、書き易くし、区別せしむ

一 政定本史書集巻の細目カード出来、  
甘閑院室に交付しむ



一 河田氏の清承のころしんまをくカムブリッヂ  
のしんま 外務部の米穀古書籍を  
注文す

一 後を直文のころしんまのしんまをくカムブリッヂ  
の松方佐次郎のしんまをくカムブリッヂ

一 夕飯のころしんまをくカムブリッヂの  
おんまをくカムブリッヂ

十 七 情

一 伊東のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 吉原のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 伊東のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 伊東のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 洋書書籍のしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 伊東のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ

一 伊東のしんまのしんまをくカムブリッヂ  
のしんまをくカムブリッヂ



一 併設湖沼の雄気地味表へあまゆりもさき祀り  
に

一 桑原橋上寺架板の圓おまを築く身  
飯す、飯あらしと大体の持回とさし、縁う赤  
赤と提出すまきとる人下す

一 事月ぬりもさし橋上を削へて閑然をい  
とさし、飯あらしと集まると根儀、身をさす  
其の決定をたのめし

一 者所日ととんと内部入らさし  
こもと外部入らさし、其の可轉機

を備へ一人お出入せし

一 者査人座と校園をとり、風音を防く  
の設備をめぐらし

一 歩の壇系と事務室をめぐらし、呼飲を  
供ひ其の連絡を固らし

一 者査子に掛る一人を備へるさし

一 少は一名備へるさし

一 圓おま出返るる日一切終末の出納  
壇に於て元おまあり

一 橋上閑然をめぐらし、元糸を設けたる



新ろく 読後者の言と世道せしむ  
~~~~~

- 衣着の帰りを或る時を定めて交代せしむ供し衣の帰りを出入着直の元帰ると時日換りしむ
- 特別読後者のみより特別一言を代  
一 考らしむる自今を梅上の権一  
定の持安を以て特別読後者の  
こえつへきす
- 梅上読後者の衣間閉鎖しむ

十九 兩

- 他法解法 勝言出来し其志をこゆ
- 大ニ其中を扱き入に設計し之積を余す
- 此の社名を五合より之ん多程出するき誠案  
とすし 羨し 其思と内議を遂げ又別  
もす

十九



一 事務員服を改め、高塚格況来と接す  
右之取甘々ふも出入着花し保し七傳  
入るべきことあり

一 読書のせむに依りて、ちりちり修らば  
と世に二印、信りてあしをゆりし、其れ  
古四手あり、りりて右義、外十数印と  
交換す、と決定、目志、授きまをりす  
位し、代償と双方、任仲の、りりて在り  
一 校及港井、信りて、あし、試み、及、あし、信り  
ま、り、と、接あり

一 二、三、事、改、め、り

一 丸、り、と、信、り、の、ナムブリ、ジ、出版、の、ま、り、  
外、好、冊、刊、事

一 楊、信、り、と、集、冊、記、信、り、林、由、り、  
校、案、り、と、信、り、跡、亦

二十。時

一 信、り、と、信、り、と、信、り、と、信、り、と、  
其、り、と、信、り、と、信、り、と、信、り、と











一 地蔵のやねのり岩の地蔵一、二寸の物修  
考海の中十二寸と、勝字を抄す

一 小考將紙のりを大鳥香爪とて其書  
山よりあるに一快指本海言るとて其  
は之所一快指門の流系語を寄附し平

一 度史人八の二番史人牛牛系一冊を撰  
えりて其の書林に又其書をもてて其  
の物とて其書と提出す、石と半連  
着年とて其書の人二人合下す

一 史出次保愛し付る注意方、石井潤徳  
之任に抄抄す

一 史出次保愛し付る注意方、石井潤徳  
必好二冊を抄す、又若高首抄之  
史出次保愛し付る注意方、石井潤徳

一 桑原のり、青架し又其書と出す  
概も其のり、相代主十のり、其  
二十九のり、四のり也

廿号 史



一 桑原の提出の書架設計と構造  
考す

一 暖炉拵付の件  
事務室 研究室  
各々個個設計を二個あるに拵付し  
其設計に依りて相違面壁の  
拵を拵圓末の直ぐの着せし手  
也

念書

一 洋書架設計(附図)の案を考す  
其設計に依りて相違面壁の拵を拵圓末の直ぐの着せし手也

必要の材料を考す  
且ら下敷丹塗しとす

一 書架設計  
：竹の梁と流す  
下敷丹塗し丹塗を拵す

一 拵り  
：流布を拵す  
拵り

一 拵り  
：拵り  
拵り

念書







念公

一 石井重光の夫人を親しくあつた

一 希路の事柄を著書に記す所が詳長  
そのころ太監としてあつたといふ事

念公

口實 本二階(いんま)に居てはやくと詳む

一 えてあつた一室の経典を徹す

一 関之を入りに出束す

三十の頃

一 松山本よりして大里より史記秘志外一部筆末

一 己の秘本を手にして決意して彼本に於て付

一 兼に城内に願ひに付して十月に廻る

一 又如く(女)にちりて其を扱て扱を満

一 寺の宗壇及び付するもの等を扱と扱し上

一 又聖原に作る志ある中一に決意して其

一 志を成すとすまはるる二月に入念(念公)に

一 志を成し北井(北井)に於て其を成す

一 了



一 仿中志(在りし致庭版)之奇絶方印の  
致庭に於て未考を提出せしむ

一 四前四法系に如好人像購求せしむ松  
本くりせむ

一 元朝版文一冊騰字出まゝの白紙に  
由動ににりしモノを伝ふ

一 吟竹と人夫若干を唐又二階し掃除  
し看す

一 洋書に於て毎月か存するに購求未考  
と七書目録の致書と作ししもの二通づ

提出せしむること決す一箇とす致書  
之に報えむ也

一 ちり夕飯に於て致書年々書中圖をまゝ出  
人類学友会に於て冬及春の陳列と  
致す



十二月一日 兩

一 前年忠告りしと原るゆきり三千ある  
 田家州上之海お入し節もく接り  
 一 紙信の移り来る防り方し居るの事  
 之をいへる  
 一 桑原を扱き者桑原をいへるを余り  
 七か半より平均十四の数を九個也  
 一 進上仕物者と織し契約をいへる節  
 合也  
 一 桐の葉を織るを織るより比るんは一

あをいへる望し中仕切をいへる後  
 斗也

一 一よりいへるは二人より接上聞説念  
 二 完了りる也  
 一 聞説念机の排とを考へる  
 一 此の二よりいへるは臨め聞合に決し其  
 一 与る揚子でいへる  
 一 千八百九十年のセカスレポント寄信  
 一 と望むるの節書と在る四の使  
 一 被扱る扱るありしとていへる



一 二叔佛國首なるう、口くすちりく佛國  
 者若干印注文し、幸きし、  
 の、カルヴラの國、海に論、舟を  
 重復、衣を者く、事、の、交、海、  
 國、し、の、國、海、在、本、國、公、使、  
 此、も、あ、ら、う

石、か、に、ウ、ラ、の、若、あ、を、  
 ち、こ、し、る、は、  
 注、文、し、ち、と、本、の、  
 利、者、し、  
 注、文、し、ち、と、本、の、利、者、し、

十二月二日 晴

一 寺、正、ま、ま、と、  
 宮、に、之、の、  
 自、今、  
 今、日、  
 作、し、  
 衣、あ、を、  
 田、田、  
 田、田、



所あるは、あるある也。土浦のやまも、  
聘せらるゝのやうに、清張の如きし  
心謝をせししと、恐るゝを、  
九しとす。

一 自今、閑覧室と、嘆き盡る、  
何れかへき方余す。

一 事務言ひ、傍ひきし、  
あるは、個々の二階に、  
とす。あるは、  
あるは、  
あるは、

一 文界記、あるは、  
あるは、  
あるは、  
あるは、

三、

一 本、あるは、  
あるは、  
あるは、  
あるは、



一 考くは按上の底改を考う

四

一 風俗のあつた後

五

一 平治源平のころは彼れも関巻を  
のこらるゝ事なれは改のころの世を  
とす

一 河部全長担任の洋書者源氏入海

一 元朝のころは本流に後

一 元朝源氏を考へて源氏を考へて  
考へては源氏を考へて

六

一 考へては源氏を考へて源氏を考へて  
のころは源氏を考へて

七

一 考へては源氏を考へて源氏を考へて



てゝゝゝをせしむるも、後述の字を  
入るの掛、示し、圓を借る用字と  
之に付入るゝと、字の其令と入  
掛、合す

一 揚上後述の字を、何れも、其の用字  
及、其の用字、しゝゝと、其の用字、揚上  
の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
外、其の用字、其の用字、其の用字、

一 田原、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、

一 川の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、

一 本、其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、

一 其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、  
其の用字、其の用字、其の用字、其の用字、







寄給ありし

一 紙の付録等も本館に別印刷して  
扱せり

一 品目山の教録に方札を付し

一 印刷に十二の部印刷の付圖書館記  
とせしめられし

一 十月分閲覧月表等

閲覧人員の平均 五十五人。三四

回も貸出の平均 十二回五十七冊三日

十の部

一 在米植るに直して米田に注るる年報二七  
外務省の報告と他を付し言の始ありし

一 横井の報告と川崎の花とに付し言の始ありし  
又本校に於て蒐集するに商売を調査

一 其日報を交してしるす

一 本年七月より同十二月までの間に校外貸出志  
計あり

貸出回数 千九百九十八回

内五部 二百六十五回



現在抄本

九三三三三冊

一 紙の字規則ある抄印刷に托す

一 新刊の字跡に俗を丸まき、若干の國書と混交す

一 溝河小山漫氏とて國家の字法を以て施法敷る冊字終ありとて

一 年末仕掛振舞と油書きと抄を以て提出せしむ、之より千七百餘の也

十一

一 因原氏後世に傳ふる朝臣の文のや也と述ふなり

一 早稲田中の抄本に託任し傳ふる抄評記及今に述ぶ

一 在りぬ下り井印後皮印伝書其は何れも國土ありて至十日高

一 六分後とて今も抄源新釋字好あり

一 有るも雄氏とて口口トシタノノ四

早稲田大學圖書印



















十九日 晴

一 昨午の雨と本館各館休館を為し  
是れも其の如く終るを告ぐ  
暇なき事

一 休館中 終るを告ぐ  
之を告ぐ  
之を告ぐ

一 洋書カード 整理  
カネ子 洋書カード 整理  
カネ子 洋書カード 整理

一 事務 整理  
事務 整理  
事務 整理



遊園地 整理

一 洋義 整理  
洋義 整理  
洋義 整理

一 昔年 整理  
昔年 整理  
昔年 整理

一 和洋 整理  
和洋 整理  
和洋 整理

一 少司 整理  
少司 整理  
少司 整理

一 事務 整理  
事務 整理  
事務 整理



備わるときころの死を重くしむる

不問所由事七苦後生ありし

一 慶遠より未未浦分後付し

徳を授けし

一 二階有物其化於具六九拂

すくこと三階へ移すし

一 文界現ある相を即と捨

入

後化授けし

一 不問所由事七苦後生ありし

市原素は後化授けし

一 古事より其の左右に備付ありし

祭の示ありし幕しと述し

一 ちも田安子おとあく。体付をあた

る國者いれき二三の注をあらし

和傳者に聞き、聞訪を由著候

きしつゝき衛生上は意を以て



本日探と裏重移ちるカードと撮  
下るへきさし、修多、投案、手  
間、其、情、を、主、を、投、者、の、後、台、五  
日

一 浮中、下、出、信、の、歴、史、の、社、会、を、回、り  
板、刀、丸、多、き、く、浮、又、ち

一 修、子、を、介、介、中、子、我、本、文、送、し、件、を、本  
館、と、し

廿日

一 昨日曜日 飯中、を、飯、七、日

念、一、の、一、念、二、の

一 櫻井、の、時、本、事、飯、川、の、史、を、撰、く  
る、所、に、若、果、採、集、し、件、を、云、々、し  
て、云、々、

一 念、三、の、子、を、思、ひ、し、て、飯、を、人、に、物、し、事

未、考、の、思、ひ、の、所、を、云、々、

一 飯、中、の、し、り、を、思、ひ、し、て、後、代、を、思、ひ  
謝、状、を、送、る、に、き、ら、る、飯、を、今、傳、ふ



一 坪内氏の子孫洋考を多録し、隠書  
 二百餘の目録を録し、自注代價  
 を調考するなり。結ぶるは書三  
 四十一の目と切すし。代價を  
 隠書とすし。其書は、右代價  
 しく、三十四の文を一月子あり。此  
 外の易科の書ありし、坪内氏に  
 するのみならず、他を録す。其書  
 此の納付し、其書は、  
 一本校外を日録と心をもて、其書上白

今寄珍園の書は、洋書より毎日  
 傳書をゆくを本校の書に、  
 一 登壇をすし、其書は、  
 徳重の書あり

一 坪内氏の隠書に洋書あり、其書は、  
 似し代價とす、即ち、其書は、  
 十二書也。此の代價は、其書は、  
 心、其書は、其書は、其書は、  
 六十二書也。其書は、其書は、  
 其書は、其書は、其書は、



明治三十一年十二月廿五日 坪内博士より譲受之河書分類

分類	部数	冊数	全	額
文学	一二五	一三〇	二五四	〇九
理学	七	七	一二	八〇
心理	四	四	一	一、九〇
教育	九	九	一七	八五
宗教	六	六	八	五五
宗	一	一	二	五〇
史	六	六	九	二〇
言	一	一	二	〇〇
流				
学				

早稲田大學

人種	字	種	額
学	書	部	三、七五
一	二	一	九、七五
一	二	一	五、二五
一六三	一	一	三三七、二四
一六八	一	一	

念書

一 田原復校に付る前島キと坊の  
 一 考略より体質を究るしを  
 一 考略より体質を究るしを  
 一 考略より体質を究るしを  
 一 考略より体質を究るしを



〜の有り候事と違ふ  
一 坪内如く議更代筆料を赤方と云ひ  
付す

一 枋井の冬〜のあり由博士花のり候  
二月間合し四差中より大要の未年  
二月下旬の事と云ふ人ば此書が終り  
せし〜の事、三月上旬の定り候事  
と云ふ人云ふ、又の事と云ふ目録  
をきり〜の事、終り候事と云ふ  
一 数月あ〜の圖書(原書)部(赤方)部

帳古きと云ふ事あり、編定合と云ふ事  
あり候事、赤方部を以て漸々  
終りを先給、之候事と云ふ事と  
提出し〜と即ち母方枋井の〜を  
も合し七〜の六十〜と云ふ事七十冊  
也、これを赤方部と云ふ事と云ふ事

歴の更	十六部	十七冊
証候	八	八
活編	十七	十七
政次	八	九



文	四七	四八
地	一三	一三
之	一五	一五
表	一七	一七
社	四	四
技	六	七
宗	三	三
宗	二	二
寺	一	一

・寺十九ヶ所 彼より今課目し之教を記  
 ・寺十九ヶ所 彼より今課目し之教を記  
 ・寺十九ヶ所 彼より今課目し之教を記

二十ヶ所を以てし之を事務あり  
 を閉すすも」ところを以てし

（此は二十ヶ所を以てし之を事務あり）



和歌山縣立圖書館藏

和歌山縣立圖書館藏



以下全て

白紙



